

情報紙ではなく同窓生の心に!

●浦高同窓会会報『麗和』編集会議・・・!

2日は浦高同窓会会報『麗和』の編集会議でした。午後4時半、同窓会事務局のある麗和会館に11名の編集委員が集まり、『麗和 第58号』(平成27年4月10日発行予定)の会報の構成を検討しました。委員は、星野和央さん(4回卒、さきたま出版会会長)、田中薫さん(11回卒、元宮崎公立大学教授、元毎日グラフ編集長)、鯨井光夫さん(19回卒、浦高同窓会事務局長)、校内幹事の先生方7名(浦高OBで現在浦高勤務者)、そして編集素人の私・香田(25回卒)でした。

昨年1月に編集委員を仰せつかり、『56号』は第2回編集会議(初稿校正段階)から、今年4月発行の『57号』では第1回編集企画会議(12月議会議中のため)終了間際からの参加と、その任を全うしていませんでしたので少々後ろめたかったのですが、昨年の編集会議後に、田中さんから「同窓会でお役に立てるのは約10年間、香田さんはまだ現役だから今は見習い期間ですよ。定年後からが本番ですのでもっと古希まで働いてもらって、その間に後進を育てられれば卒業だな。」と温かい言葉をいただいているので、できる範囲でと思っています。

今回は、議会休会日であったため、冒頭から第1回編集企画会議に出席させていただき、こうして紙面構成が固まっていくのかということをお勉強させていただきました。

* *

◆同窓生に何を伝えるのか!

今年度編集長を務められる富田先生がホワイトボードにページ割を書き込んでいきます。ここ数年はA4・20ページで、今年発行の『57号』では・・・

- 1p・・・表紙、目次
- 2p・・・会長と校長の挨拶
- 3p・・・特集1「百二十周年に向けて」
- 4p～7p・・・特集2「花園に集いし浦高魂」
- 8p～9p・・・麗和会・浦高会の「和」(地域職域同窓会責任者会議)
- 10p・・・追悼、広がる森づくり(浦高百年の森)
- 11p・・・果てしなく広がる同窓の輪(各同期会等からの寄稿)
- 12p～13p・・・麗和セミナー(卒業生から在校生へ)
- 14p～15p・・・会員の声(会員からの寄稿)
- 16p～17p・・・学校は今(人事異動、進路状況等)
- 18p・・・前校長退任挨拶、同窓会総会・講演会
- 19p・・・事業報告・会計報告
- 20p・・・事務局通信



となっており、これを参考としてページ割の話合いが進んでいきます。

そんな中で、星野さんから「前はラグビー部の花園出場という目玉があったが、今回の特集の目玉は何だろうか・・・?」という問いかけがありました。ここで星野さんがおっしゃりたかったことは、特集として出す内容は今年4月以降を考えるだけではなく、来年4月発行の意味を考えることなのですね。

そして、星野さんから「今回は『浦高創立120周年』という節目を題材として、学校行事や同窓会の取り組み(奨学財団や知的財産委員会、同窓会あり方検討委員会の取り組み)などを特集して、120周年という学校の節目を学校と同窓会がどう捉えているのか、どう祝おうとしているのかを会員にお伝えすることが会報の使命なのではないだろうか。それぞれ担当している責任者の人たちから寄稿していただき、我々が編集者としての視点で一つにまとめてあげることが大切だと思う。また、地域職域同窓会のページでは、各地域職域同窓会を実際に取材してそれぞれの活動や地域ならではのその会の特徴などをクローズアップしていくことも必要ではないだろうか。さらに、『果てしなく広がる同窓の輪』や『会員の声』では、事務局や編集委員が幅広いネットワークを持って、同期会や会員の活動や活躍、寄稿いただけるような内容に対してアンテナを張っておくことが大切だ」と。

編集委員として、初めて携わる編集企画会議に当たって、さまざまな本の編集・出版に携わっておられる星野さんからの「会報を責任もって創り上げる」ための覚悟についてのご指摘はなるほどと思いました。そして、全体の構成がまとまり、編集委員の分担が決まり約2時間の編集企画会議が終了しました。

その後の懇親会の中で、他の会でもお付き合いのある星野さんから「香田さんが、さまざまな会の記録や春日部地区浦高会や同期会の会報などで、記録を取って記事をまとめ上げ、インターネット上の情報も取り入れて構成していく能力は認めますし、そのパワーには頭が下がるのですが、一つだけ注文があります。それは内容が流れていってしまう“情報”になっていることです。誰の心に伝えようか、何を訴えようという視点が欠けているのではないかと危惧します。同窓会会報は会員のために何を伝えるのか、会員の心に響く内容でなくてはならないのです。」と、有り難いご指摘をいただきました。

* *

●覚悟をもって・・・!

私は先輩たちのお誘いを気軽に受けて『麗和』編集委員の一人として参加させていただきましたが、一会員であると共に編集者という視点で「会員の心に響く記事」を綴るという覚悟が大切なのですね!